

季刊「かばごん」も 80 回目、20 周年を迎えました。まさに光陰矢の如しであります。20 年前と比べると小児科の外来もずいぶん変わりました。入院を要するような重症感染症はほとんど見られなくなりました。大きな要因は、VPD（ワクチンで防げる病気）はワクチン接種しようという意識が高まったためでしょう。無料で行える定期予防接種の数もとても多くなりました。病気が少なくなったために、まるでワクチンや健診外来のような日もあります。もう一つは不登校や心身症など「こころ」の問題を抱えた子どもたちが増えている印象があります。生きづらさを感じやすい世の中になっているのでしょうか。忙しい小児科の外来で、生きづらさを抱えた人たちを支えていくのは難しく、心療内科や精神科などの専門家にお任せすることがほとんどです。しかし、これからは我々小児科医が初期の段階で気楽に相談にのることが大切になると思います。



【最近目立つ病気】

おたふくかぜ、ウイルス性胃腸炎、溶連菌感染症、アデノウイルス感染症、RSウイルス感染症、水痘、手足口病、ヘルパンギーナ、マイコプラズマ感染症、夏風邪と思われる高熱が 1～2 日続くもの、EB ウイルス感染症などがみられています。アレルギー性鼻炎や気管支喘息等のアレルギー疾患も多くなってきました。一部で季節外れのインフルエンザも出たそうです。こうしてみると何でもありですね。首都圏や関西では麻疹（はしか）がみられています。うがい、手洗い、マスクという基本的な感染症予防が重要です。また、アレルギーのある方は何度も言いますがエアコンのフィルターの掃除を必ず行ってください。

【突発性発疹症】

突発性発疹は、乳児期に罹患することが多く、突然の高熱と解熱前後の発疹を特徴とするウイルス感染症で、予後は一般に良好です。原因ウイルスは、ヒトヘルペスウイルス（HHV）6 あるいは 7 がほとんどです。HHV-7 は HHV-6 よりも遅れて感染する傾向があるため、HHV-7 による突発性発疹は臨床的には二度目の突発性発疹として経験されます。

疫学

感染症発生動向調査によると、報告症例の年齢は 0 歳と 1 歳で 99% を占めており、それ以上の年齢の報告は稀です。しかし、近年は罹患者の高年齢化がみられています。季節性はなく、年次による差異もほとんどありません。原因ウイルスの HHV-6、HHV-7 の血清疫学調査からは、2～3 歳頃までにほとんどの小児が抗体陽性となることが判明しており、不顕性感染は 20～40% と報告されています。

病原体

1910 年に本疾患が記載されて以来、原因ウイルスは長い間不明でしたが、1988 年、山西らにより HHV-6 であることが証明されました。その後、突発性発疹の中にエンテロウイルスが原因であるものが含まれていること、また HHV-6、エンテロウイルスのいずれでもない原因不明の突発性発疹があることも明らかとなり、1990 年に新しく発見された HHV-7 もその初感染像として突発性発疹を呈することが 1994 年に報告されました。

両ウイルスとも初感染以降は潜伏感染状態となり、断続的に唾液中から排泄さ

れます。現在のところ感染経路としては、唾液中に排泄されたウイルスが経口的あるいは経気道的に乳児に感染すると考えられています。また、子宮頸管粘液からウイルス DNA が検出されるという報告もあり、周産期における感染も感染経路の一つである可能性があります。一方母乳からの感染は否定的です。初感染時の潜伏期は、約 10 日と推定されていますが、私の印象ではもっと長く感じます。

臨床症状

乳児期に発症するのを特徴とする熱性発疹性疾患です。38℃以上、40℃を超えることも稀ではない高熱が 3 日間ほど続いた後、解熱とともに鮮紅色の斑丘疹が体幹を中心に顔面、四肢に数日間出現します。随伴症状としては、下痢、眼瞼浮腫、大泉門膨隆、リンパ節腫脹などがあげられます。診断は、その特徴的な臨床経過により、発疹出現をもってなされることがほとんどです。発熱初期に熱性痙攣を合併することがありますが、一般に経過は良好です。まれに脳炎、脳症、劇症肝炎、血小板減少性紫斑病など重篤な合併症をおこすことがあります。

治療・予防

通常、予後良好のため、対症療法にて経過観察するのみです。予防方法はありませぬ。（国立感染症研究所ホームページより改変）

【麻疹に関する情報】

今年は特にアジアの国々（インドネシア、モンゴル等）に渡航歴のある患者さんの届出報告が多いそうです。麻疹が流行している国に渡航する前には、必ず麻疹含有ワクチンの接種歴を確認し、未接種未罹患の場合は、接種後に渡航を予定してください。また、定期接種対象者で、まだワクチンを受けていない場合や、受けそびれていた場合は、できるだけ早めの接種をご検討ください。

麻疹の初期症状は、発熱とカタル症状（咳、鼻水、眼球結膜の充血等）です。これらが数日続いた後、口腔内に麻疹に特徴的とされる白い粘膜疹（コプリック斑）が現れます。コプリック斑が出現すると、一旦体温は下がったかのように見えますが、すぐに高熱となり、体に赤い発疹が出始めて、全身に広がります。肺炎、中耳炎等を合併することが多く、麻疹患者 1,000 人に一人は脳炎を合併し、命に関わります。空気感染、飛沫感染、接触感染で感染伝播し、どんなに広

い場所（例：コンサート会場や体育館等）であっても、免疫がなければ同じ空間にいただけで感染し発症する危険性が高くなります。

麻疹ウイルスに感染後、約 10-12 日の潜伏期間を経て発症してきますので、麻疹含有ワクチンの接種歴がなく、発熱、咳、鼻水、眼球結膜の充血等のカタル症状を認めた場合は、約 10～12 日前の行動を思い出し、特に、海外や人が多く集まる場所に行っていた等がある場合は、麻疹を疑って、事前に医療機関に電話連絡してから受診してください。

（国立感染症研究所ホームページより改変）

【ワクチン最新事情】

B 型肝炎ワクチンについて平成 28 年 10 月 1 日から定期接種になります。予防接種法における分類は A 類疾病です。また、母子感染予防事業の対象者で、健康保険の給付により既に HBV ワクチンの投与を受けた者については定期接種の対象外です。接種対象者は平成 28 年 4 月以降に出生した 1 歳未満の乳幼児で標準的な接種期間と回数は生後 2 ヶ月、3 ヶ月、7～8 ヶ月の 3 回で 1 回に 0.25ml を皮下注射します。接種完了までに約半年（最短で約 5 か月）が必要です。体調のよい時に早めに受けましょう。

おしらせ



☆大手町の夜間急病診療所（TEL:222-0099）では午後 7 時から 11 時まで、小児科と内科の診療を年中無休で行っています。加畑の担当は、9/29・10/27・11/20・12/11・12/29 の予定です。来年 1/1 は当番医です。

☆金沢市では幼児期の任意接種のワクチン（おたふくかぜ・インフルエンザ）についての助成金制度を行っています。詳細は受付でお尋ね下さい。

☆駐車場の整備でご迷惑をおかけします。遅くとも 10 月末には完成しますので、ご容赦のほどお願い申し上げます。

☆世界の宝「憲法 9 条」を次の世に贈りましょう。

